ベラルーシにおける日本文化情報センターの取り組み

辰 巳　雅 子

日本文化情報センター開設の経緯

現在、私はベラルーシ共和国の首都ミンスクにある市立児童図書館内で日本語を中心に日本文化をベラルーシ人に広める仕事をしている。

日本に住んでいたとき私は大学でロシア語を専攻していたわけではないが、ベラルーシ大学に語学留学し、その後、ベラルーシで日本語を教えることになった。その頃のベラルーシ大学には教材はなく、書店に教科書も辞書も会話集も売られていなかったため、日本側に窮状を訴えたところ、碓井博男さんという方が、かつてチェルノブイリ原発被爆児童の支援活動をしていた御縁から寄付を申し出てくださった。この厚意に甘え教科書をモスクワで購入して夜行列車でミンスクに運んだりしていたのだが、せっかくなのでチロ基金という名称をつけて寄付金を募ったところ、支援の輪が広がリ始めた。これが 25 年前のことである。その２年後ミンスク市立第５児童図書館内にチロ基金が日本文化情報センターを開設した。

ミンスク市立の図書館内にあるセンターを日本の基金が支援しているのはなぜなのか疑問に思われる方も多いと思う。ベラルーシでの公立図書館事情が日本とは異なり、市内に複数の公立図書館がある都市部では、一般の図書館業務とは別に特別な部門を開設し各館が独自の特色を出そうと努力している。このような背景があり日本文化情報センターはミンスク市立図書館の一施設としてオープンした。そのためいわゆるテナント料は発生せず、光熱費なども支払っていない。このように無料で場所の提供を受けるのは大きな助けだが、具体的な活動のための必要経費はミンスク市役所からは予算計上されない。そこをカバーしてくれるのがチロ基金であり、ベラルーシ人に日本文化を知ってもらうためには日本からの支援が不可欠であることは言うまでもない。

翻訳プロジェクト　新美南吉ロシア語・ベラルーシ語童話集

20 年以上に及ぶ日本文化情報センターではベラルーシ人向けに茶道の紹介、着物展、人形展などを開催してきた。また書道や墨絵の体験会、将棋の対局、日本の歌を歌う会、折り鶴ワークショップを通じての平和教育運動も行なっている。2007 年からは日本語教室を始め、今までに入門した生徒数はおよそ 600 人。ただ日本語は難しいのと、授業料が無料であることから気軽に始めて気軽にやめるベラルーシ人が多い。まずは日本語学習者数の裾野を広げることが優先すべき目的なのでそれでよいと考えている。

教材はチロ基金が購入したものを活用している。生徒の年齢は 6 歳から 65 歳までと幅広く、絵本の翻訳作業にも取り組んできた。約 90 冊の日本の絵本をロシア語あるいはベラルーシ語に翻訳し、翻訳文は日本語の文章の上に印刷した紙の一辺を手作業で貼り付け、二ヶ国語で読めるようにしている。しかしこれらの絵本は、もともと日本人の子どもたちから寄贈されたものであり、ベラルーシ国内には日本文化情報センター内に 1 冊ずつしかない計算になる。

もっと多くのベラルーシ人に日本の児童文学に触れてもらおうと、新美南吉生誕 100 年を記念して、2013 年にロシア語とベラルーシ語に翻訳する作業を開始し、少しずつベラルーシの新聞や児童雑誌に掲載されることになった。その後 14 作品をまとめて 2016 年に「新美南吉ロシア語訳童話集『ごんぎつね』」を出版した。日本文化情報センターの翻訳プロジェクト第 1 弾である。翻訳を担当したのは日本語教室の生徒 2 名である。挿絵は私が担当し、全員素人であるため無償でこなして経費を低く押さえた。もともと営利目的の出版ではないのでミンスクの出版社からチロ基金の自費出版という形で印刷し、ベラルーシをはじめとする旧ソ連各地のロシア語圏の図書館や日本語学習機関約 200 箇所に寄贈した。

2018 年には 16 作品を収録した「新美南吉ベラルーシ語訳童話集『手袋を買いに』」を出版。これはベラルーシ国内の図書館を中心に寄贈した。その結果ベラルーシでは児童図書館を中心に、感想画が描かれ、また童話を劇にして子どもたちが上演するようになった。感想画の多くは半田市の新美南吉記念館に寄贈された。新美南吉の童話を読んで人生が変わりましたという感想を寄せてくれたベラルーシ人の司書もいる。

翻訳プロジェクト　壷井栄ロシア語訳作品集

日本語教室も 10 年以上続けていると、上級者に当たる生徒も増えてきた。また 2017 年から日本語能力試験（JLPT）の会場にミンスクもようやく仲間入りすることになり、ベラルーシでの日本語熱は大いに高まった。

日本語の勉強のためにと、多くの生徒に新しい翻訳プロジェクトである壷井栄ロシア語訳作品集『二十四の瞳』に参加するよう呼びかけたところ 25 名が集まった。手分けして翻訳したのは以下の 6 作品。『まつりご』『ともしび』『妙貞さんのハギの花』『柿の木のある家』『坂道』『二十四の瞳』。さらに外国人には覚えにくい日本人名がすぐ分かるように『二十四の瞳』には主な登場人物名一覧をつけ、内容理解に役立つよう訳注を充実させ、日本文化を知る手助けになればと日本語用語集も自分たちで作成した。

ここでどうして壷井栄を翻訳することにしたのかという質問が出る。海のない国ベラルーシとも、私個人とも全く縁もゆかりもない作家である。そもそもはミンスク言語学大学の学生 3 人が、日本文化情報センターを実習先に選んだことから始まる。大学 4 年生になると通訳か翻訳の仕事をするのが必修の 3 ヶ月の実習で、何を翻訳するか決めるときに、児童図書館なので児童文学作品であること、今まで翻訳されていない作品であること、提出義務の

A4 ページで最低 24 枚という条件を満たす作品を日本文化情報センターの所有文献の中から探したところ、壺井栄の短編集に白羽の矢が立ったのである。

こうして一人の学生が『坂道』『妙貞さんのハギの花』を、もう一人が『まつりご』『柿の木のある家』の第一章を翻訳した。三人目の学生は、「子ども向けの文学は簡単すぎていやです。もっと難しい作品を訳させてください」と頼むので、『二十四の瞳』第一章を訳すことになった。学生たちは実習期間中に翻訳を仕上げ、大学に提出し、よい点数をもらったそうだが、結局努力して訳しても実習の課題にすぎず、宿題のようなもので、それを読むのは翻訳した本人、指導した私、確認と評価をした大学の先生の三人だけで、それ以外誰の目にも触れることはない。もったいないなあと思っていたのである。そのため、自分の日本語教室の生徒に呼びかけて『柿の木のある家』と『二十四の瞳』の続きや他の短編を翻訳するプロジェクトを始めたのである。

壺井栄の作品を翻訳するのは難しい。特に小豆島の方言がベラルーシ人には全く分からない。仕方がないので、私が本文中の方言を全て標準日本語に翻訳することから作業は始まった。ロシア語訳を作るためにまず日本語から日本語に翻訳しないといけなかったのである。

また壺井栄がよく作品中に挿入する歌の歌詞の翻訳にも時間がかかった。だいたいの意味が分かればいいですよと私が言うと、逆に、「いや、ロシア語でもきれいに聞こえる詩に訳したい」と奮闘する生徒が出てくる。『二十四の瞳』のラストでマスノが「荒城の月」を歌う場面では私が、「出だしの『春高楼の花の宴』と聞くだけで涙を流す日本人がいるんですよ。有名な歌で続きを知っているから作者の意図するところが分かるんですよね。でも、2 行分の歌詞を読むだけではベラルーシ人は分からないですよねえ。物語の最後のシーンなのにあまり感動しないかも」と言うと、最終章担当の生徒は、それならばと「荒城の月」の歌詞を全て翻訳すると言い出した。同じクラスの生徒も手助けをし、歌詞の翻訳は完成した。冒頭２行だけではベラルーシ人読者にとっては情報が少なすぎるので、第 1 連の歌詞の翻訳を本文に挿入し、全訳は巻末の訳注に記載したので読者の理解も深まると思う。

第八章の章題「七重八重」も本文中にこの四文字の漢字すら出てこないし、どのように翻訳したらいいのかさっぱり分からないので、平安時代の兼明親王の短歌のことから説明した。日本の和歌や俳句はすでに著名なプロのロシア人翻訳家たちが多くロシア語に翻訳しているが、調べたところこの山吹の和歌はロシア語訳がなかったので、翻訳担当の生徒が訳して、これも巻末の訳注に加えた。しかし、もしすでにロシア人翻訳家の手によって翻訳されているのをご存知の方がいれば、ぜひともご一報いただきたい。

最も難題だったのは『二十四の瞳』第七章にある早苗の手紙である。大石先生が病気になって学校に来なくなったのを心配した早苗が書いた手紙はこのとおり。

> 拝啓、先生のご病気はいかがですか。私は毎日、朝礼のときになると、心配になります。大石先生がいないとせえがないと、小ツルさんや富士子さんもいっています。男子もそういっています。先生、早くよくなって、早くきてください。岬組はみんな心配しています。小夜奈良。

この「小夜奈良（さよなら）」をどう翻訳するのか第七章担当の生徒と考え込んでしまった。まずロシア語には漢字がないし、日本語特有の表現である当て字のことも分からない。漢字を直訳して「Маленькая ночь в Наре」では機械翻訳のようであるし、ロシア語読者はチンプンカンプンだろう。日本語の言葉遊びをロシア語で分かるように訳すか、あるいは長い説明を加えるしかない。簡単に「До свидания（さよなら）」と訳したらいいのではとも思ったが、それだと早苗の手紙を読んだ大石先生が思わず吹き出して、「さよならを、ほら、こんなあて字がはやってるんよ、お母さん。」と話しかけるセリフの意味がロシア語読者には伝わらない。До свидания ではおもしろくとも何ともないからだ。どうしたらいいのか知

恵を絞った結果、縦読み（折句）を使うことを提案した。担当の生徒は説明を聞いて縦読みの方法が分かったらしく、作ってみますという返事。その結果、До свидания を縦に折り込んだ早苗の手紙ができあがった。

Дорогая учительница,
Осведомляюсь о Вашем здоровье.
С нами Вас нет на утреннем приветствии.
Волнуюсь.
И когда Вас нет, не хочется учиться.
Даже Коцуру и Фудзико так говорят,
А также мальчики.
Надеюсь, Вы скоро выздоровеете
И вернётесь к нам.
Я и все из Мисаки переживаем за Вас.

ロシア語にすると吹き出すほどのおかしみはないかもしれないが、早苗の優秀さが表れる翻訳にはなったと思う。これでその後の大石先生と母親の会話、「字もうまいでないか、六年生にしちゃあ」「そう、いちばんよくできるの」も生かせることとなった。

他にも壷井栄特有の文体には多々悩まされた。簡単な言葉はひらがな表記するので子ども向けの日本語文章、つまり児童文学らしさがあるのに、難しい漢字はそのまま使うという特徴的な文体である。例えば、前述の早苗の手紙だと「拝啓」という難しい漢字が使われているのに、「小ツルさんや富士子さんもいっています」の「いっています」はひらがなのままなので「言っています」なのか「行っています」なのか、ベラルーシ人は瞬時に判断できない。外国人の日本語学習者も上級になると、「ひらがなより漢字をたくさん使って日本人は本を書いてほしい」と苦情を言い出すのだ。

しかし、ようやく翻訳は完成した。そしてそのときベラルーシは 2020 年 8 月の大統領選挙の混乱の真っ只中にあった。社会情勢は激変し、ミンスク図書館に寄贈する計画は現時点で停滞している。ただチロ基金支援者の一人で、新美南吉ロシア語・ベラルーシ語作品集出版に多大なご協力をしてくださった赤間悟さんに救っていただいた。手作りの印刷・製本作業により、昨年夏、日本でごく少部数ながら本の形にすることができた。うち２冊を小豆島の壷井栄文学館に寄贈できたことは、25 人の翻訳者全員にとって心から喜ばしい出来事だった。

日本語能力試験と「私たちのテスト」

ベラルーシ人の生徒にとって日本文学の翻訳作業は大変難しかったと思うが、やり遂げた者にとっては大きな自信に繋がったと思う。これでみんな日本語能力試験の読解問題もすらすら読めるね、と話していたが、2020 年７月に予定されていた日本語能力試験は全世界の全会場での実施がコロナウイルス感染拡大の影響で中止になった。

ミンスク会場での受験生はおよそ 180 人で、総受験者数が 20 万人という中国の会場などと比べると、まだまだ日本語学習者が少ない地域だと主催者側に思われている。そのためモスクワのような大都市の会場だと１年に２回行われる試験も、ミンスクでは年に１回しか行われない。それでも 2017 年の第 1 回ミンスク会場実施の前の時代は、生徒を引率して、ロシアやウクライナ、ポーランドへ越境受験したものである。このような苦労があったためミンスク会場での試験中止にみんな落胆した。

もっと落胆したのは翌年である。2021 年度は試験を実施するかどうかは各会場の実行委員会の判断によるとされていたが、2020 年にミンスクでの受験料を納めていた者は簡単な手続きだけで 2021 年の受験ができるとされていたので、当地の試験実行委員会は意欲に満ちているだろうと信じていた。ところが、７月の試験の中止を２月早々に告知したのである。受験料は返金されたが、その対応が非常に遅かったので、日々インフレが続いているベラルーシ人にとっては冷や汗ものだった。1 年もの間受験料を預けっぱなしにしていたからである。その受験料を預かっていた試験実行委員会は、2 年連続の中止の理由をベラルーシはコロナウイルス感染が拡大しているからと説明したが、ベラルーシではロックダウンもなく公共交通も平常通りの運行で、不特定多数が集まるイベントも 2021 年にはほとんど中止されていなかったため、生徒の間で不満が広がった。

その結果、中止になった分の代替実施を求める署名活動が生徒の間で自発的に始まった。ミンスクでは１年に１回しか行われていないところをモスクワのように１年に２回実施することを主催者に要請することにしたのである。その結果、受験者数は平均 180 人であるのに、代替試験を求める署名は 340 筆も集まった。署名を集めた生徒自身はもちろん、生徒の日本語学習を支える保護者や周囲の理解者のおかげである。この署名活動は私が主導したものではなく、あくまで受験者であるベラルーシ人が行ったものである。署名は東京にある日本語能力試験主催者の国際交流基金に届けられ受理された。

もっとも署名を集めたら、こちらの要求が必ず通るわけではない。それが分かっているので、ミンスクでの日本語能力試験実施を悲観して、第三国での受験や学習継続をすることに決めた生徒が昨年秋にごっそり日本語教室を退学してしまった。ベラルーシで 2017 年に盛り上がった日本語学習熱は 2021 年には冷めてしまったのである。

一方で 2021 年には新入生も多く入学してきた。例年以上に中学生と高校生が多い。アニメの影響かと思ったが、実際には日本語に限らず子どもに早くから外国語教育を受けさせて、将来は外国で就職してほしいと願う保護者がベラルーシに増えたということだった。逆に 20 代の新入生はたったの一人だけで、この世代の若者は昨年のうちに留学先や就職先を見つけて出国したのである。その行き先は外国人労働者受け入れに慎重な日本ではないのが皮肉である。このような両国をめぐる状況を今年の保護者会で説明しないといけないと思うと少々気が重い。だが、就職氷河期の真っ最中、早々にあきらめて留学という形で日本を出た私としては、ベラルーシを次々と出国していく若者の気持ちが理解できるし、そして外国人である私を受け入れてくれたベラルーシに恩返ししたい気持ちもある。

日本人は「外国人に日本文化は人気がある。昔から映画や文学、最近はアニメも世界的に有名で、日本が好きだと言う外国人は大勢いる」と思い込んでいないだろうか。このように考えるのは日本人にとっては気分が良いことだが、以前と比べると外国人にとって日本は経済的には憧れの国ではなくなっている。外国人労働者にとって閉鎖的であることはご周知のとおりだ。しかし、ぼんやりしていると、ベラルーシ人を受け入れてくれる就職有利な国の言語に、近い将来日本語は人気を奪われてしまうだろう。

ベラルーシにおける日本語学習熱を冷めさせないために、チロ基金が経費を負担して、日本語能力試験の代わりとなる独自の模試試験を作成することになった。その名も「Наше тестирование Фонда Чиро チロ基金提供私たちのテスト」である。チロ基金が提供しているので、受験料は無料。各レベルとも本物そっくりの出題になるよう問題用紙と解答用紙を作

成した。しかし日本語能力試験は問題数を公開しているのに、点数配分は非公開なので、「私たちのテスト」の点数配分を自分で決めなければならなかった。この問題ができたら 2 点、この問題はたぶん 4 点が配分されていて、これで満点の 180 点になるかなあ、ああ、ならない、それじゃあ、この問題は 3 点配分かなあとさんざん計算をしてこちらで採点方法を打ち立てた。本物の試験のほうはマークシート方式でコンピュータが採点するのだが、「私たちのテスト」は私が赤ペンで丸付けをして電卓を叩く。ともかく自力、自助、自費出版と、何でも自ら着手していかなくてはいけないのである。テスト終了後、正式な日本語能力試験合格認定証と比べると、就職に有利になるわけでも何でもないが、和紙で表彰状を作成してパチパチ拍手しながら合格者に授与した。生徒にとって日本語を続ける上での指針、励みになれば幸いである。

　最後に日本とベラルーシの二つの国をめぐる状況に理解を示し、支援してくださっているチロ基金支援者に深く感謝の意を表したい。両国にとってよりよい関係が築けるような人材が日本文化情報センターの日本語教室で一人でも多く育ってほしいと願っている。

参考文献　『二十四の瞳』壺井栄　ポプラ社　1995 年

辰巳雅子

　チロ基金・日本文化情報センター代表。

　訳書「自分と子どもを放射能から守るには」（ウラジーミル・バベンコ　ベルラド放射能安全研究所共著　世界文化社刊）

　論文 "Деятельность Иосифа Гошкевича в Хакодатэ".　Журнал международного права и международных отношений. 2012-№3..